

オランダの東南アジア研究

—— 言語地理民族学研究所の業績を中心に ——

中 村 孝 志

周知のようにオランダの東南アジア研究は、戦後ばう大なその海外領土を失い、必然的に方向転換をよぎなくされた。戦争はこの国でも直接間接に若い有望な多くの研究者を犠牲にしたし（例えば、歴史の J. C. van Leur, 1908-1942, B. Schrieke, 1890-1945. 歴史考古学の W. F. Stutterheim, 1892-1942. 言語の S. J. Esser, 1900-44. W. Kern, -1946. らはその一例）またかりに幸いに生き残ってもかつての職場を失い、最近は漸く海外の研究機関に就職して若干の知識の輸出をおこなっている者もあるが、それでも研究機関の減少は多くの有能な研究者に生活の苦しみを与えている。加うるに将来に対する希望を失ったオランダの青年たちは、東南アジア研究の意欲を喪失し志望者を激減させていることも否定できない事実である。植民地高級官吏を養成していた（これは必然的に専門家の育成につらなった）ライデン大学（1876年以降）、ユトレヒト大学（1925年以降）以下多くの養成所は機能を停止し、多数あったインドネシア地域を対象とする研究誌も読者を失って多く廃刊に帰した。この間にあって戦後新たに創刊され優秀な研究論文を多く収載してその活躍が期待されていた隔月刊の文化誌 *Indonesië* も刊行10年（1947—1957）にして惜しくも挫折したことは、オランダにおける研究活動が著しく困難になったことを端的に示している。オランダの東南アジア研究が重大な危機に來ていることは否定すべくもない。

かかる際オランダの研究機関は再編成されて研究方向を改め、かつての東南アジア一辺倒から熱帯圏あるいは亜熱帯圏に指標を向け、危機打開を試みた。かつてはオランダの植民地研究に参謀本部的役割を果たしていた1919年アムステルダムに設立の植民研究所 *Koninklijke Vereeniging "Koloniaal Instituut"*

が、戦後（1945—50）いち早く名称をインド研究所 *Koninklijke Vereeniging "Indisch Instituut"* に改め、更に1951年から熱帯研究所 *Koninklijk Instituut voor de Tropen* と三転したのや、あるいはまたハーグのオランダ領インド言語、地理、民族学研究所 *Koninklijk Instituut voor de Taal-, Land- en Volkenkunde van Nederlandsch-Indië* が、オランダ領インドの名称を除いて広く一般に言語地理民族学研究に対象を切換えたこと等はその若干例である。そしてまた過去において蓄積された層の厚い研究者の優れた成果を、解説的なかたちであるいはより読者の多い英語に翻訳して学界に提供しようとしているのも、また一つの傾向である。1950年以来熱帯研究所内に事務局が設けられた *Editorial Committee on Selected Studies on Indonesia by Dutch Scholars* (van Leur, Indonesian Trade and Society, 1955. B. Schrieke, Indonesian Sociological Studies, 2 Vols. 1955-1957. W. Brand-H. J. van Mook, The Indonesian Town: Studies in Urban Sociology. 1958. J. L. Swellengrebel (ed). Bali: Studies in Life, Thought, and Ritual, など日本でも知られた書が刊行されている), やハーグの言語地理民族研究所の翻訳叢書、解題叢書などその一例である。熱帯研究所については、かつて小文ながら紹介したこともあるので¹⁾、ここではオランダにおける東南アジア研究に大きな寄与をし、現在もなお有力な地歩を占めているハーグの研究所の業績を *Bibliographical* に紹介しつつ、オランダの東南アジア研究の現状を素描することにする。

1) 拙稿、「王国熱帯研究所」『アジア経済』2巻5号（1961）pp. 70-71.

王国言語地理民族学研究所

研究所は、有名なハーグの平和宮からあまり遠くない Piet Hein Straat の電車路からちよっとはいった van Galenstraat 14 にある。普通家並の一軒で、番地を求めて捜さなければそれと判らない位の平凡な建物である。これが100年以上にわたって東南アジアを研究し多大の成果をあげて来たオランダの東洋学が誇る一牙城とはとても受取られない。そして研究所といっても専任の研究者がいるわけではなく、ただ僅かに図書室があって研究会員（内外に約500名）に圖書を貸出し、閲覧を許している位の、外観は大学の図書室程度の規模にすぎない。

研究所の成立は1851年6月に遡る。

当時オランダ領インドには有名なバタビア学芸協会 Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen が出来ており（1778年）、やっとこの頃から学術誌 Tijdschrift voor Indische Taal-, Land- en Volkenkunde=略称 TBG を刊行できるようになり（1853年）、そしてまたまもなく1879年からはモノグラフの形で紀要 Verhandeligen van het Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen=VBG を発行するようになった。（ちなみにオランダ領インドにおける東南アジア研究の中心として数々の優秀な論考を発表したこの学会も、戦後はインドネシアに引きつがれて Lembaga Kebudajaan Indonesia と称し、数回の雑誌刊行を見た如くであるが、近年は刊期不定のようである。）

オランダ本国のデルフトでは海外植民地と対応して、先に植民省長官を勤めたことのあるバウト J. Ch. Baud, 1789-1859 首唱の下にデルフト官吏養成所長 シモンズ G. A. Simons, それに同所でジャワ語を教授していたタコ・ロールダ Taco Roorda, 1801-1874 らが相寄ってオランダ海外領土、植民地研究のための一学会の設立が議され、同年8月をもってデルフトに王国オランダ領インド言語、地理、民族学研究所 Koninklijk Instituut voor Taal-Land en Volkenkunde van Neêrlandsch Indië の設立を見（のちハーグに移転）、東南アジア諸地方の文献（刊行書、未刊文書）を蒐集し、研究論集を発行し、隣接諸学会と連絡を保ちつつ、海外の研究者と交流を図ることを期したのである。

しかし、ここで研究所の沿革史を述べることは本意

でもないので、次に現在の主な事業を中心に説明を加える。

まず第一に (I) 研究発表方面としては、

- (1) 研究誌、言語・地理・民族学寄与 (B.K.I.)
- (2) 紀要 Verhandeligen
- (3) 啓蒙紹介的な Bibliographical Series と Translation Series
- (4) 慣習法集成 Adatrechtbundels
- (5) Anthropologica.
- (6) その他研究書

等の発行があり、(II) 文献資料蒐集面としては図書館の整備、運営があげられる。

1. 言語地理民族学寄与 Bijdragen tot de Taal-, Land-en Volkenkunde (van Nederlandsch-Indië)=略称 BKI [初めは Neêrlandsch Indië と称す] 's-Gravenhage.

研究所は1853年以来上記の学術研究誌 (B.K.I.) を発行している。初めはオランダ領インドを研究対象としていたので誌名にもそれを冠していたが、1949年、105巻以降はこれを改めて広くこの方面の研究論考を登載することとした、しかし、永年の伝統は依然保持されて、インドネシア関係の論考が極めて多い、季刊、本年(1964年)をもって120巻を数える。近年はあまり長論文はのせめ方針であるが、かつては全巻を一論文をもって充当したようなこともあった。例えば、

- DI. 9. (1862年)、ニューギネア。民族誌的、自然誌的調査 (1858年) Nieuw-Guinea, Ethnografisch en Natuurkundig onderzocht en beschreven in 1858 door een Nederlandsch Indische Commissie. bl.1-233.

- DI. 33 (1885年)、ブラジルとジャワ。アメリカ、アジア、アフリカにおけるコーヒー栽培報告, Brazilië en Java. Verslag over de Koffiecultuur in Amerika, Azië en Afrika. Aanboden aan Zijne Excellentie der Minister van Koloniën door K. F. van Delden Laërne. bl.1-626.

- DI. 43 (1894年)、南スマトラ法制資料、ファンデンベルグ編訳。Rechtsbronnen van Zuid-Sumatra. Uitgegeven, vertaald en toegelicht door Mr. L. W. C. van den Berg. bl. ix+352.

Dl. 48. (1898年), シナにおけるオランダ人, フルーネフェルト, 第1部 シナ貿易最初の努力と澎湖島の占拠, 1601—1624. *De Nederlanders in China door W. P. Groeneveldt. Eerste stuk. De eerste bemoeiingen om den handel in China en de vestiging in de Pescadores*(1601—1624). bl. xii+598.

Dl. 64. (1910年), アンボン誌, ルムフユース *De Ambonse historie... beschreven door Georgius Everhardus Rumphius. 2 dln in I*, bl. 327. 162.

等はそれであり, 或いは Dl. 57 (1907年), 87 (1931年), 91 (1934年), 93 (1935年), 96 (1938年) の数冊を充てたヘーレス・スターペル編のオランダ領インド外交文書集成 *Corpus Diplomaticum Neerlandico-Indicum* door J. E. Heeres-F. W. Stapel もある。ちなみにこの外交文書集成の最終巻第6巻は単行本としてスターペル編で本研究所から刊行されている。

F. W. Stapel. Dl. VI. 1753—1799. Den Haag. 1955. xvi+743 bl. 編者ヘーレス, 1858—1932 は, マライ群島オランダ人史料集などを編したハーグ国立文書館に勤務した植民史家, また, スターペル, 1879—1957 も大冊オランダ領インド史 *Geschiedenis van Nederlandsch Indië. 5 Dln. Amsterdam. 1938—1940.* の編集者, あるいは, フアンダムの東インド会社誌 *Pieter van Dam, Beschrijvinge van de Oostindische Compagnie, 7dln. 1927—1954.* (但し最後の1巻を除く) の校刊者として知られたオランダ植民史研究の第一人者であった。

マライ群島におけるヨーロッパ人活躍の歴史を述べたティーレ 1834—89 P. A. Tiele, *De Europeeërs in den Maleischen Archipel* の論考は, 今にいたるまで利用度の高い秀作であるが, これも初め本誌に9回にわたって分載されたものであった。全775ページに達する大論文であるが漸く17世紀初葉, 1623年代を述べたところで死亡のため中絶した。

その他ライデン民族博物館長であった H. H. Juynboll 1867—1945 の *Ramayana* の一部の翻訳 *Sarga VII—XXV* も14回にわたって分載され

ているし *Vertaling van Sarga van het Oud-javaansche Rāmāyana*. キールストラ, 1844—1920のスマトラ西海岸に関する論考も7回にわたって連載された。E. B. Kielstra. *Sumatra's Westkust*.

かくて, 収載論文約1400は, オランダの誇る東南アジア研究の宝庫といってもいい過ぎではあるまい, 執筆の最も多いのは言語学, 仏教学の H. Kern, 1833—1917で全体の8%にあたる110編, 次が歴史学者 P. A. Leupe, 1808—1881 の69編, 更に下って36編は19世紀中葉のインドネシア研究の P. H. van der Kemp, 1845—1921. また H. H. Juynboll, J. Pijnappel, 1822—1901. G. P. Rouffaer, 1860—1928. J. Gonda, 1905—(現ユトレヒト大学梵文教授) 等も多作の方である。これら雑誌は110巻までの内容目録が利用できる。

W. C. Muller, *Inhoudsopgave van den Artikelen in de Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde van Nederl.-Indië*, dl. 1 (1853)—90(1933). Den Haag. 1933.

H. van Meurs. dl. 91 (1934)—100 (1941). Den Haag. 1941. H. C. G. van Rietschoten, dl. 101 (1942)—110(1954). Den Haag. 1955.

2. 紀要 *Verhandelingen van het Kon. Instituut* = V. K. I.

研究所はまた紀要 *Verhandelingen* を monograph で今次大戦直前から刊行し始めたが, 戦後は速度を早め(現在までに42冊), またその内容も必ずしもインドネシア地域に限らなくなったが(今のところ他地域は2冊), 依然として大半はこの地域のものである。使用語も近年は英語のものが多く, 発表者もオランダ人のみでなくなったことも, 雑誌(BKI)の場合のそれと同様である。

今, 紀要のそれぞれを内容によって分類して見ると(正確に分題できぬが), (1) 歴史 13, (2) 文学伝説 11, (3) 言語 8, (4) 法律慣習 4, (5) 民族誌 3, (6) 先史 2, (7) 地理 1, の順となる。

歴史の場合その対象地域はジャワ 7, インド 3, マライ半島 2, ボルネオ 1, の順であるが, 文学, 語学等最近はニューギネア(イリアンパラット)関係が非常に増加して5冊を数えている。これは近年まで帰属未定で, オランダが管理統治していた間に, 多くの学

者、宗教家の研究がこの方面に結集されたものと見るべく今後なお若干の労作が現われるものと期待される。

以下、紀要のそれぞれについて簡単な説明を加える。

H. R. van Heekeren, *The stone age of Indonesia*. 1957. viii+141 blz. [XXI] 以下かつ内は紀要の番号。

The Bronze-iron age of Indonesia. 1958. 108 blz. [XXII]

インドネシアの史前学ないしは考古学については、知られるところが甚だ少ない。ただ僅かに G. H. R. von Königswald, R. Heine Geldern を初めとする外国の学者に混って P. V. van Stein Callenfels, 1883-1938. W. J. A. Willems A. N. J. Thomassen à Thuessink van der Hoop らが若干の研究を行なった位で、まだ概要を記述しうる段階である。ファンデルホープがかつて概説を記したことがあったが (*Geschiedenis van Nederlandsch Indië*. Amsterdam, 1938. Dl. 1. De prehistorie. blz. 9-111. 邦訳、野原達夫、インドネシアの原始文化、東京)、近年ヘーケレンが、東南アジア周辺のそれとの関連を見つつインドネシアの石器時代、青銅器時代の概説を試みた。まだ試論の域を出ないかもしれぬが、充分注目してよいものと思われる。

歴史時代に入って、欧人渡来以前のインドネシア史に関するものとしては、

E. J. van den Berg, ソラの滅亡 *De val van Sora*. 1939. xvi+193blz. [II]

W. F. Stutterheim, マジャパヒトの王宮 *De Kraton van Majapahit*. 1948. ix+131 blz. [VII]

がある。

ベルグの著わしたソラの滅亡というのは、マジャパヒト王国第二代の王ジャヤナガラに対し反逆を企てて滅されたソラの事蹟をうたった *Kidung Sorandaka* の齣字とオランダ訳である。原本は永らくその存在が知られなかったが、N. J. Krom, 1883-1945 が椰子葉に書かれたものをバリ島で発見、C. C. Berg, 1900- がかつてその研究をおこなったこともあったが、(*De Middeljavaansche historishe traditie*, Santpoort, 1927). 今回初めて全訳がなされたのである。

る。

マジャパヒトに関しては更に一つストッテルハイムのマジャパヒトの王宮なる好論を産んだ。マジャパヒトの王城は *Trowoelan Desa* (モジョケルト) にあったが、彼はナガラクルタガーマ等を用いてこれの考証をした、著者ストッテルハイムの死亡は今次戦争のかもした損失の一つでもあるので、次にその略歴を概述する。

彼は1892年ロッテルダムの薬剤師の末子として生まれライデン大学に学び *Rāma-Legenden und Rāma-Reliefs in Indonesia*, München, 1925 で学位を得たが、ジャワに渡って考古局に勤務 (1924-26)、のちソロ (まもなくジョクジャに移る) の中学校東洋古典学科主任に任ぜられた、教科書用に編纂されたインドネシア文化史叢書、三部作 I. *Hindu's*, II. *Het Hinduisme in de Archipel*. III. *De Islam en zijn Komst in den Archipel*. (邦訳、高村東介、回教と蘭印群島、昭和16年東京) Groningen-Batavia, 1932-35. はその時代の所産である。これより先、彼は絵で見るジャワ文化史 *Cultuurgeschiedenis van Java in Beeld*, Weltevreden, 1926 を著わしている。その後バリ島に研究旅行をおこない *Oudheden van Bali*, 2 dln. 1930 をはじめ、バリ考古学に関する若干の研究を発表した。1936年には考古局長に就任、1940年 *Inscripties in Nederlands-Indië*. dl. 1. を発行、折から成起した太平洋戦争で一時日本軍に抑留されたが、ボロブドール修復の特殊技能をかわれて解除、意見書を執筆中1942年9月10日、脳溢血に斃れた。論考極めて多く (著作目録は A. J. Bernet Kempers の編したものが *Oudheidkundig verslag*, 1941-1947. blz. 23-28. にあるという) その一部は本研究所訳叢書第一にとりあげられ、英訳刊行されているが (後述)、小論ながら歴史学界に問題を提起した *A Javanese Period in Sumatran History*, Solo, 1929. 25 p. について一言述べておく。それは従来 J. P. Vogel 1871-, N. J. Krom らによって、室利仏逝のサイレンドラ家が8世紀頃ジャワを征服発展したと述べられたに対し、彼は Kedoe 発見 (1927) の銅板刻文 (907 A. D.) 中に *Kalasan* 碑 (778 A. D.) 中の王名と同じものを見出し、この碑中のサイレンドラ家は *Tjanggal* 碑 (732 A. D.) を建てた *Sanjaya* 王の家系と同じであるとしてジャワサイレンドラ家のス

マトラ発展説を述べたものであった。これはその後インドの R. C. Majumdar, フランスの G. Coedès, J. Przyluski 日本の桑田六郎博士等も加わって有名なサイレンドラ論争を起こした問題の研究であった。

オランダの艦隊がインドネシアに最初に現われたのは1596年でバタビアを根拠地として東亜貿易の開拓に従事したことは周知のことである。その際、対支、対日貿易の一拠点として考慮されたのはマライ半島の間、シャム湾に臨む太泥 patani であった。東インド会社(V.O.C.)は17世紀当初からこの地に商館を設けたが、後年澎湖島、台湾の占領が実現してその意義を失い撤退するに至っている。この間の事情を究明したのがテルプストラ教授(1884—)の労作、

H. Terpstra, *De Factorij der Oost-Indische Compagnie te Patani*, 1938. iv+250 blz. [1]で傍証至らざるなき考証には間然するところがない。なお、教授には東西両インド海岸に会社勢力の確立した歴史を究明したオランダ人コロマンデル海岸占拠史 *De Vestiging van de Nederlanders aan de Kust van Koromandel*. Groningen 1911 (Diss.) 東インド会社の西岸到来 *De opkomst der Westerkwartieren van de Oost-Indische Compagnie (Suratte, Arabië, Perzië)*. Den Haag, 1918. 前インドのオランダ人 *De Nederlanders in Voor-Indië*. Amsterdam, 1947 (patria. 39). や、近くは Jacob van Neck, *Amsterdams Admiraal en Regent*, Amsterdam, 1950. の研究もあるオランダ植民史の研究者である。

会社勢力のインドへの確立は、近年さらに会社の未刊文書を駆使しての精緻な研究が出現している。その一つはルロフス女史のインド西海岸マラデル海岸のオランダ人占拠史(1603年より1663年まで)、

M. A. P. Roelofs. *De Vestiging der Nederlanders ter Kuste van Malabar*. 1943. iv+396 blz [IV]

であり、また18世紀の会社とマイソールの関係を論じたのがローハイゼンの研究、

J. van Lohuizen, *The Dutch East India Company and Mysore*, 1961. viii+205 blz. [XXXI]である。前者は近年マラッカを中心とするアジア貿易を論じた大著、M. A. P. Meilink-Roelofs, *Asian Trade and European Influence in the Indonesian*

Archipelago between 1500 and about 1630, The Hague, 1962. ix+471p. (Amsterdam 大学 diss. 永積昭 書評 東洋学報 Vol.46. pp. 133-138, 参照)を出したハーグ文書館勤務の学究である。

17世紀コロマンデルの研究はデリー経済専門学校で経済史を講じているというライチャウドリ氏の詳細な論考が出ている。

Tapan Raychaudhuri, *Jan Company in Coromandel, 1605-1690. A study in the interrelations of European commerce and traditional economics*, 1962. 230p. [XXXVIII]

本研究所の紀要ではないが、セイロン研究には近年 K. W. Goonewardena, *The Foundation of Dutch Power in Ceylon, 1638-1658*. Amsterdam, 1958. xx+196 p. や Sinnappah Aasaratnam, *Dutch power in Ceylon, 1658-1687*. Amsterdam, 1958. xxii+246 p. 等が刊行になった。筆者は数年前オランダやイギリスの古文書館、図書館等でインド、パキスタン、セイロン出身の青年学徒が、多数孜孜として研鑽に従事している姿に接した。近年オランダ、イギリスで南アジア関係書が多数出版されるのはこのような事象の成果と考えられる。

ジャワ史の研究では、マタラム王国の王統を、ジャワ側の史料(ババット)とポルトガル、イギリス、オランダ等西欧の記録と相対比しながら、鋭意闡明しつつある一連の労作がフラーフ教授によってなされている。ジャワ側の史料には西欧側のそれとは異なった伝説、時には文学とも見られるものがあり、これをどの程度史実として解釈するか問題がある。扱う者により評価はおのずから異なってくるが、一つの試みとして問題作といえよう。

H. J. de Graaf, *De regering van Panembahan Sénapati Ingalaga*, 1954. 149 blz. [XIII]

De regering van Sultan Agung, Vorst van Mataram (1613-1645) en die van zijn voorganger Panembahan Séda-Ing-Krapjak (1601-1613). 1958. xii+308 blz. [XXIII] 永積昭 書評 東洋学報 43, (1960). pp. 148-152.

De regering van Sunan Mangku-Rat I Tegal-Wangi, Vorst van Mataram, 1646-1677.

dl. 1. *De ontbinding van het rijk*, 1961 xii+212 blz. [XXXIII]

dl. II. Opstand en ondergang, 1962. viii+214 blz. [XXXIX]

同教授には欧人で一番最初にジャワ国内を旅行し報告を残した人として知られているファンフーンのマタラム王宮遣使記 *De vijf gezantschapsreizen van Rijklof van Goens naar het Hof van Mataram, 1648-1654*. Den Haag. 1956 [Werk. Linschoten vereniging, 59] xvi+280 blz. 等、史料出版のほか、インドネシア史概説 *Geschiedenis van Indonesië*, Den Haag. 1949. などの著書もある、もとインドネシア大学の講師を勤めた学者である。

東インド会社は1799年多額の借財を残して破産し、オランダ本国また19世紀はじめにかけてフランス、イギリスに支配され混乱の月日を送ることになる。東インド自体は1811年から1816年までの数年間、いわゆるイギリスの中間統治時代を迎え副総督 Th. Stamford Raffles, 1781-1826 の行政をうけることになった。ラッフルズは前世紀末設立された *Bataviaasch Genootschap* の有力会員として自らジャワの研究をおこない *History of Java*, 2 vols. 1817. 2nd ed. 1830 を著わしたことはあまりにも有名である。これの完成に当たって彼は、イギリス、オランダの多くの学者を動員して科学的調査を行ない研究の先鞭をつけた。その一つに封建的諸制度を廃止しようと試みた地租 (landrent) 制度の創設がある。土地収入の制度に法的基礎を与えるため土地占有権の性質を知ろうとして Mackenzie 委員長の下に土地調査を実行した。かくて、ラッフルズは土王は一切の土地の最高の所有者であり、土着農民は一種の定額小作人、地租納入者と見るべきであるとの結論に達したのであった。しかし、この結論は土王の専制政治のおこなわれた侯領地のみには妥当したが、その他の地では正当でないとの反論も出て、その後のインドネシア研究はラッフルズの調査政策を批判、再批判の形で展開した。特に近年このような問題を中心に数多く論考を発表している人にマラヤ大学 Bastin 教授がある。彼は紀要 XIV に、

John Bastin, Raffles ideas on the land rent system in Java and the Mackenzie Land Tenure Commission, 1954. viii+193 blz. [XIV]

を発表したが、その他 *The Native policies of Sir Stamford Raffles in Java and Sumatra*, Oxford,

1957. xx+163p. や *Essays on Indonesian and Malayan History*. (Monographs on Southeast Asian Subjects No. 2) Singapore. x+202p. 1961. などを著わしている。そしてまた最近、19世紀マライ群島を中心とする英蘭の関係を究明する多くの著作が、特にイギリス側でなされているが (C. Northcote Parkinson, C. D. Cowan, Nicholas Tarling 等)、教授はその中心人物の一人と見てよいであろう。本研究紀要にはこれに関するものとして、

Graham Irwin, Nineteenth-century Borneo. A Study in diplomatic rivalry, 1955. xi+251p. [XV].

Harry J. Marks, The first contest for Singapore, 1819-1824. 1959 viii+363p. [XXVII]

がある。

民族学ないしは民族誌的論考としては

C. Nooteboom, Oost-Soemba. Een volkenkundige studie. 1940. 182 blz. [III].

および

Hadji Hasan Moestapa, スンダ人の習俗 *Over de gewoonte en Gebruiken der Soendaneezen*. Uit het Soendaasch vertaald en van aantekeningen voorzien door R. A. Kern. 1946. xiv+290 blz. [V] がある。

ノータボーム、1906—はライデン大学でインド学を修め、戦前は東インドで官吏を歴任したが、戦後はライデンやロッテルダムの民族博物館の技官を勤めた人、東インドネシアが専門で、その学位論文 *De Boomstamkano in Indonesië*, 1932. は東インドネシアの独木船についての民族誌的研究である。ハツサンムスタパのスンダ人の習俗を蘭訳したケルン1875—は同じくデルフトの官吏養成所を出た後、東インドで官吏を歴任した。後ライデン大学に転じ、今次戦争までスンダ、ブギス、マカッサル語を講じていた。マカッサル語、ブギス語等の文書目録を編したり、*De Islam in Indonesië*, 1948 等小篇を著わしたが、近年はスンダ語オランダ語群典の編纂に専念していた。

文学ないしは神話伝説の範疇に入るものに

F. S. Eringa, Loetoeng Kasaroeng. Een mythologisch Verhaal uit West-Java. Bijdrage tot Soendasche taal-en letterkunde. 1949, vii+394 blz. [VIII]

- A. Teeuw, Hariwansa. I. Tekst en Critisch apparaat, 102blz. II. Vertaling en aantekeningen. 107blz. 1950 2 dln. [IX]
- C. Hooykaas, The Old-Javanese Rāmāyana Kakawin with special reference to the problem of interpolation in Kakawins. 1955. 64p. [XVI]
- P. Donatus Dunselman, Kana Sera. Zang der Zwangerschap. 1955. 284blz. [XVII]
- G. W. J. Drewes. Een 16de eeuwse Maleise vertaling van de Burda van Al-Busiri (Arabisch lofdicht op Mohammad). 1955. 100 blz. [XVIII]
- W. Kern, Commentaar op de Salasilah van Koetai. 1956. viii+193 blz. [XIX]
- Teuku Iskandar, De Hikajat Atjeh. 1958. 205 blz. [XXVI]
- E. M. Uhlenbeck-J. Soegiarto Aantekeningen by Tjan Tjoe Siem's vertaling van de Iakon Kurupati Rabi. 1960. viii+67 blz. [XXIX]
- G. W. J. Drewes, De Biografie van een Minangkabausen Peperhandelaar in de Lampongs. 1961 159 blz. [XXXVI]
- C. Skinner, Sja'ir Perang Menkasar by Entji' Amin. ed. and transl. 1963. vii+315p. [XL]

等がある。

ジャワ所伝 Ramayana の翻訳は、はじめサンسكريット学者の H. Kern が試み、H. H. Juynboll (東洋学者 A. W. Th. Juynboll, 1833-1887 の子) によって継続されて B. K. I 誌を飾った。ユインボルは Mahabharata, Adiparwa, Wirataparwa など古代 Java 文学研究の権威であるが、また、ラーマヤーナ text の語彙を蒐めて本研究所から刊行している。Kawi-Balinesesch-Nederlandsch glossarium op het Oud-Javaansche Rāmāyana. 1902. vi+644 blz. 近年 ホーイカスが韻文の補入問題を取りあげて論及したのが、研究所紀要 XVI である。彼は Proza en Poëzie van Oud-Java. 1933 や、マライ文学を概述した Over Maleise literatuur. 1937. 2ed. 1947. Leiden. や Literatuur in Maleis en Indonesisch. Groningen-Djakarta. 1952. 等で知られた現在 London 大学アフリカ、アジア言語研究所に勤務する

インドネシア文学の学者である。

西部ボルネオカプアス河の中流サンガウ地方に住む Mualang Dayak (約8千)婚姻の歌を採録、オランダ訳したドウンセルマンはフランシスコ会士であるが、彼はまた同部族の慣習法を研究し、またカプアス地方の Kendajan Dayak の言語、慣習等を調査し、何れも近年の B.K.I. 誌に発表している。

マホメットのアラビア詩のマライ訳の研究をし、また18世紀末葉スマトラの南部ランボン地方に居住したメナンカバウの一胡椒商人 Nachoda Muda の伝記 (原本は Marsden の旧蔵、彼の英訳本あり) を蘭訳したドレウェス、1899—は東インドで言語官、バタビア法科大学、ライデン大学等でマライ語、イスラム制度等を講じたアラビア学者である。その学位論文、三人のジャワ師父 Drie Javaansche Goeroe's: hun leven, onderricht en Messiasprediking, Leiden, 1925. viii+214 blz. は、近年蘭訳出版になった16世紀の—ジャワプリンボン (予言書) Een Javaanse Primbon uit de Zestiende eeuw, 1954. Leiden. 157 blz. と共に、ジャワ人の精神生活、思惟を知るために必読の書である。

W. Kern の註したクタイ年代記 Salasilah van Koetai とはボルネオクタイ河流域に栄えた王国の記録である。19世紀中葉に筆写されたこの記録は各種の系統本があり、スヌック・フルフロニエによる若干の研究が行なわれたが、メースはバタビヤ学芸協会博物館所蔵のいわゆるベルリン写本を翻字し、解説を加えてライデン大学の学位論文にした。C. A. Mees, De Kroniek van Koetai, 1935. Santpoort. 290 blz. ボルネオの言語調査官であった W. Kern (有名な H. Kern の孫) は諸種の写本を比較してこれに補注を付しバタビヤ学芸協会から刊行しようとしたが、折から戦争勃発でその意を得なかった、戦後この原稿が本研究所紀要に収められることになったのであるが、彼自身は戦争中長崎での強制労働が祟ったものか、戦後ボルネオでの研究再開まもなく、1946年6月、バンジャルマシンで急逝している。彼にはまた1740年バタビヤ華僑の惨殺されたいわゆるシナ人戦争、紅河の役をうたった長詩 Sja'ir の研究がある。Aantekeningen op de Sja'ir He'mop (Sja'ir Kompani Welandaberperang dengan Tjina. T. B. G. 82 (1948). bl. 211-257. これはルスコニの翻字した学位論文 G. Ru-

sconi, Sja'ir Kompani Welanda berperang dengan Tjina. Utrecht. 1935. 212 blz. に補注を付したものの、両者ともに歴史書としては扱い得ぬかも知れぬが、事実を側面から眺めることが出来る興味深いものの一つといってよい。ケルンはこのような傾向のものに興味を持っていたらしく長生していたら、更に多くの労作を世に問うたのであろうとその早逝は惜しまれる。

16世紀はじめスマトラ西北端に成起したアチェ王国に関する史書であるアチェ物語 Hikayat Atjeh については生田滋氏が東洋学報に批評紹介 (Vol. 43. pp. 602-606) をしているので、それによられたい。

アラビア詩の模倣であるシャイルには歴史事実をうたった長編が多いが (先述のバタビアシナ人戦争のシャイルもその一例) 近年マラヤ大学のスキンナーがロンドン、ライデン両大学所蔵の二写本を校合してオランダ東インド会社の17世紀中葉におけるマカツサル攻撃をうたったシャイルを翻字、英訳した。この戦争については F. W. Stapel, 1879-1957 の学位論文ボンガヤ条約 Het Bongaais Verdraag, Groningen, 1922 247blz+iv があり、また時の総督スパールマンの伝記も彼によって B.K.I. 誌 94 (1936) に発表されている。(単行本としても発売) これら史書と詩との比較研究はまた興味あることと思われる。

言語学関係紀要には次の如きものがある (除ニューギネア)。

G. Maan, Proeve van een Bulische (南ハルマヘイラ) spraakkunst. 1951. 160 blz. [X]

J. Wils, Het passieve werkwoord in de Indonésische talen. 1952. vii+247 blz. [XII]

E. M. Uhlenbeck, De systematiek der Javaansche Pronomina, 1960. viii+63blz. [XXX]

地理関係としては A. Teeuw, Lombok, Een dialect-geografisch studie 1958. vii+247 blz. [XXV] 一種のみであり、法律、慣習法関係には次の3点が数えられる。

J. J. Dormeier, Banggaisch (モルッカ海中の島嶼群) adatrecht, 1947. vii+306 blz. [VI]

G. W. J. Drewes-P. Voorhoeve. Adat Atjeh. Reproduced in facsimile from a manuscript in the India Office Library. 1958. 47p. Introduction and notes. 174p. [XXIV]

Han Bing Siong, An outline of the recent

history of Indonesian Criminal Law. 1961. 75p. [XXXII]

慣習法についての記述は後に譲るが、インドネシア地域以外の研究については次の如きものがある。

J. Brugman, De Betekenis van het mohammedaanse recht in het hedendaagse Egypte. 1960. 215 blz. [XXVIII]

Silva W. de Groot, Van isolatie naar integratie. De Surinaamse Marrons en hun afstammelingen. officiële documenten betreffende de Djoeka's (1845-1863). 1963. vii+100 blz. [XLI]

最後に、今次大戦まであまり研究の行なわれなかったニューギネア (イリアン) は、近年民族学研究のフィールドとして (cf. J. Pouwer, New Guinea as a Field for Ethnological Study. BKI 117 (1961). (pp. 1-24) あるいは帰属未定期間中行政上の要請から言語調査、はまた言語教育が行なわれた。(cf. H. K. J. Cowan, Voorlopige resultaten van een ambtelijk taalonderzoek in Nieuw Guinea, Den Haag, 1953, J. C. Anceaux, De huidige stand van het taalonderzoek op Nieuw Guinea's Westhelft. BKI. 109 (1953). blz. 231-49) これら業績の大要は Bangkok 太平洋学術会議に提出された報告を見れば、近年如何に多くの努力が傾倒されたかが判明する。Anthropological research in Netherlands New Guinea since 1950. By the Bureau for Native Affairs. Oceania. Vol. 29 (1958-59). pp. 132-163. Oceania Monographs. No. 10, 1959.

研究所紀要にも若干の業績があるので次に概述する。

G. J. Held, Waropense teksten (Geelvink baai, Noord Nieuw-Guinea) 1956. xvi+400 blz. [XX]

H. Myron Bromley, The phonology of lower Grand Valley Dani. A comparative structural study of skewed Phenemic Patterns. 1961. xvi+98p. [XXXIV]

J. C. Anceaux, The linguistic situation in the islands of Yapen, Kurudu, Nau and Miosnum, New Guinea. 1961 166p. [XXXV]

J. P. K. van Eechoud, Ethnografie van de

Kaowerawédj (Centraal Nieuw-Guinea). 1962. 200 blz. [XXXVII]

P. Drabbe, Drie Asmat-dialecten, 1963. vii + 236 blz. [XLII]

J. C. Anceaux, The Nimboran Language, [XLIIL.] (in preparation).

ヘールフィंक湾内ヤーベン島対岸のワローペン人の調査をしたヘルド教授、1906—1955は、はじめオランダ聖書協会の宣教師で転じて言語官、ジャカルタ大学教授の職にあった人である。早く文法、語彙等の研究を発表し、Gramatica van het Waroepensch (Nederlandsch Noord Nieuw-Guinea). V. B. G. 77. (1942). Woordenlijst van het Waroepensch (Nederlandsch Noord Nieuw-Guinea) V. B. G. 77 (1942). 次で民族誌的研究、Papoeas van Waropen. Leiden, 1947 (英訳 The Papuas of Waropen, The Hague, 1957. 本研究書翻訳叢書), De Papoea, Cultuur in Provisor, Den Haag. 1951 等を行ない、なお多くの研究が期待されたが早逝した。彼のネクロロジーについては J. P. G. Josseling de Jong. Herdenking van Gerrit van Held (1 Juli 1906—28 September 1955). BKI 112 (1956). bl. 343—を参照。研究所発表分の紀要は彼が1936年から40年まで滞在中蒐集した民族譚の原文にオランダ訳を付したもので遺稿ともいえるものである。またアンセウ博士はオランダ言語学会に属するニューギネア研究の言語学者、ニンボラン計画で有名なニンボラン地区の集約的言語研究を行ない、ヤーベン島その他の言語調査も行った。

エツヒオウトの中央ニューギネアカオウエラウェジの民族研究は、本次大戦勃発直前の1939年5月から翌40年5月まで、警視として中央ニューギネアウイッセル湖方面からヘールフィंक湾方面への探検調査の際の報告書(ミメオ版) Verslag van de exploratietoht naar Centraal Nieuw Guinea のマンベラモ河東岸スリネフェルの北に住する Kaowerawédj 部族の民族誌的記述を印行したものである。著者はその後湖沼平原 Meer-vlakte 方面の探検も行ない大戦勃発による日本軍の進撃によって一時ニューギネアを退避したが、戦後はまたまたニューギネア各地で行政に参加し、現地行政に最も通曉したオランダ人の一人であった。1950年、14年間の勤務の後、本国に帰還した

が、在任中の知識を盛った Vergeten Aarde. 1951. Met Kapmes en Kompas door Nieuw-Guinea, 1953. Woudloper Gods, 1954 などを著わしたという(いずれも筆者未見)。その後 Rotterdam の Nieuw-Guinea Instituut 編の Vademecum voor Nederlands Nieuw-Guinea, 1956. Den Helder には Secretaris として該博な彼の知識が織り込まれているが、惜しくも1958年死亡した。

聖心会 ドラッベ師のニューギネア言語研究、特に Kamoro, Asmat, Awjoe, Marind 等南西海岸地方の言語研究に精力的な活動を続けていることは Stefan Wurum, P. Drabbe's Study on the languages of South-West New Guinea. Anthropos, Vol. 49 (1954). pp. 299-304 に詳しい。

師は初め(1915年以来)任地タニンバル島の Fordat, Jamdeen 語の研究に従事したが、1927年賜暇で一時帰国した際 J. van Eerde 教授の激励で民族学的研究をも志した。1935年ニューギネアミミカ区の伝道に転じてからは南西ニューギネアの言語研究に従事し、1948年一時帰国した際は永年にわたって収集した24の方言をユトレヒト大学 J. Gonda 教授援助の下に整理し、続々として BKI 誌, Oceania, Anthropos. Tijdschrift N-G. 等の学術誌に論考を発表した。その他本研究所から紀要のほか単行本としても成果を問うている。Sprakunst van de Kamorotaal, 1953. 111 blz. Sprakunst van het Aghudialect van de Awju-taal. 1957. viii+88 blz. Kaeti en Wambon. Twee Awju-dialecten. 1959. 186 blz.

師の蒐集した資料は極めて多くそれを整理して J. H. M. C. Boelaars 師の The Linguistic Position of South-Western New Guinea, Leiden. 1950. が出ている程である。なお師の労作に関しては拙稿、オランダの西ニューギネア開発政策, アジア経済研究所, 参考資料 12. 1962. pp. 63-64 および東印度におけるキリスト教宣教師の学的寄与, 日本文化28(1950) pp. 79-80 を参照せられたい。

3. Bibliographical Series と Translation Series

研究所の近年の事業で特記すべきことは、過去におけるオランダ人の業績を宣揚せんと努力していることであり、そのためには Bibliographical Series とし て書誌解説的な叢書を設け、言語、歴史、民族誌的分

野における論考を紹介し、また通用度の少ないオランダ語で発表された名著を Translation Series と名付けて英語に移して世に送っていることである。吾人にとっては極めて便益をうけることの多い注目すべき仕事であろう。

A. Bibliographical Series.

1. P. Voorhoeve, Critical Survey of Studies on the languages of Sumatra, 1955. 55p.
2. A. A. Cense — E. M. Uhlenbeck. Critical Survey of Studies on the language of Borneo. 1958. 82p.
3. P. Suzuki, Critical survey of Studies on the Anthropology of Nias, Mentawai and Enggano. 1958. 97p.
4. W. Ph. Coolhaas, A critical survey of studies on Dutch Colonial History, 1960. 154p.
5. A. Teeuw, A critical survey of studies on Malay and Bahasa Indonesia, 1961. 176p.
6. J. Voorhoeve-Antoon Donice, Bibliographie du Nègro-anglais du Surinam, 1963. viii+116p.
7. E. M. Uhlenbeck, A critical Survey of Studies on the Language of Java. (in preparation).

スマトラの言語を解説したフオールフーフは戦前スマトラの言語官を勤め、現在はライデン大学図書館東洋文書部勤務の士、ボルネオのそれを担当したセンスはバンジャルマシンの年代記 *De Kroniek van Bandjarmasin*. Santpoort, 1928, 176 blz. でライデン大学の学位を得たボルネオ研究の専門家、戦後しばらくインドネシア大学文学部長、後に学長を勤めていた。ユーレンベックは *De structuur van het Javaanse Morpheem*. VBG. 78 (1949). Bandoeng, 240 blz. で Leiden 大学の学位を得たジャワ語の専門家、同じくインドネシア大学に勤務したが現在はライデン大学で言語学、Java 語を講じている。テーウは同じくインドネシア語、マライ語の教授であり、彼のこの書については崎山理氏の紹介があるのを参照せられたい。(東南アジア研究 3 号 pp. 105-106.) スマトラの外島、Nias, Mentawai, Engano の人類学的業績を解説した Peter 鈴木氏は日系の二世と聞いたが

詳細を失念した。

オランダ植民史文献の解説をしたコールハース, 1899—は Utrecht 大学教授, 戦前東インドに勤務した官吏で H. T. Colenbrander, 1871-1945, F. W. Stapel 1879-1957 なき現在, オランダ植民史研究の第一人者, 戦後発表した論考20数編を数えるが, 近くは colenbrander の編したクーン書簡集 J. P. Coen, *Bescheiden omtrent zijn Bedrijf in Indië, 1614-1629*. 5 Dln. Dln. 6 *Levensbeschrijving*. 1934 に, 第7巻 (1—2), 2 Dln. 1952-53 1943 blz. を追加し, また目下東インド会社の一般報告書 *Generaale Missiven* の校刊を行なって(全10冊の予定), 既に1610—1638年までの第一冊を刊行した。1960. xxiv + 782 blz. [R.G.P. 104]

B. Translation Series.

1. W. F. Stutterheim, *Studies in Indonesian Archaeology*. 1956. xx+158p.

著者の経歴については既述したが、研究所は翻訳シリーズの第一に彼のボロブドールに関する論考以下文化史的論考6篇を英訳して収めている。周知の様にボロブドールに関しては N.G. Krom, 1883-1945, T. van Erp らの大著, *Beschrijving van Barabudur*. 1920-1921. があるが、それは浮彫や構造自体の研究が中心で、名称、形態、歴史的意義に関しては研究不足であった。著者は歴史考古学者としてこの方面に目を向け、1929年 Batavia で単行本として刊行したが、本書にはその英訳を収めている。なおまた、各種雑誌に発表した

Some remarks on pre-Hinduistic burial customs on Java, A thousand years old profession in the princely courts on Java, An ancient Javanese Bhima cult. An important Hindu-Javanese drawing on copper 等を収めている。

第2には Held の *The papuas of Waropen* が収められているが、これに関しては既述した。

3. W.H. Rassers, *Pañji, the culture hero; a structural study of religion in Java*, 1959. ix+304 p.

ジェンガラ王子パンジーの行跡を中心とするパンジー譚は、ジャワ人の民族性、思惟を知るの

に重要な民族文学であるが、ラッセルス、1877—はライデン大学の学位論文にこれを取りあげた。De Pandji-Roman, Antwerpen, 1922. ただしこの翻訳は学位論文のそれではなく、B. K. I. その他学術誌に発表した演劇関係、クリス（短剣）など論考の英訳である。著書はかつてライデン民族博物館長を勤めた文化人類学者。

4. Th. Pigeaud, Java in the fourteenth century. A study in cultural history, 5 Dln. 1960-63.

マジャパイト王朝最盛期の王ハヤムウルク頌徳のため宮廷詩人プラパンチャが1365年捧げたという Nāgara-Kērtāgama は14世紀ジャワの社会状態、王朝の支配形態など当時の東南アジアを知る最重要な史書として著名である。初めこの椰子葉に記された写本が、1894年11月 J. Brandes, 1857-1905.によってロムボク島のバリ王家 Cakra Negara 秘庫中に発見されるや、彼はまずその翻字を1902年のパタビア学芸協会紀要 (V.B.G. 54) に発表した。その後 H. Kern はオランダ訳に従事し、若干の注を付して1903年から14年までの De Indische Gids 誌や, BKI 誌に分載発表した、これは後に博士の全著作集 Verspreide Geschriften 全15冊（補遺、索引を加えて17冊, 1913—36）中の7,8巻に Oud-Javaansche Lof-dicht Nāgarakrtāgama van prapañca, 1365 A. D., 1917-18. として収められて、本研究所から刊行された。しかし博士の訳は恣意の改訂が行なわれて問題が多いというので研究所ではその新訂版を N. J. Krom 教授に嘱して出版した（1919年）。その後ジャワの碩学 Poerbatjaraka 博士（先般逝去した）など新訳を試みる人もあったが、(cf. Aanteekeningen op de Nagarakrt-agama. BKI. 80, 1924) クロム博士の訳も絶版で入手困難になっているので、研究所は新たにジャワ語の権威、ライデン大学図書館東洋文書部のピジョウ博士に嘱して新訳、原典の翻字、補注、語彙、索引等5大冊の出現となった。博士はジャワ語辞典、文学関係の論著も多いこの著作をなすに最適の人の一人である。ちなみにナーガラクルタガーマの原文書は現在ライデン大学 Legatum Warnerianum 文庫 Codex Orientalis 5023

として保存されている。

5. F. D. K. Bosch, Selected studies in Indonesian Archaeology. 1961. 203p.

著者（1887—）はもとライデン大学東南アジア古代史、考古学の教授、永らく東インドの考古局長としてインドネシア歴史考古学の調査を行なった人である。手もとに本書がないので具体的に内容を述べられないのを遺憾とする。

6. Hans Schärer, Ngaju religion. The conception of God among a South Borneo people. 1963. xv+229p.

Schärer, 1904-1947 の学位論文 Die Gottes-idee der Ngadju Dajak in Süd-Borneo, Leiden. 1946. を英訳したもの、著者は7年間、宣教師として Ngadju Dajak の部落に入り、彼らの宗教、社会を研究したが早逝した。本書はスタンフォード大学 Rodney Needham が英訳し、P. E. de Josseling de Jong 教授が序文を付している。

7. G. C. Vergouwen, The social organization and customary Law of the Toba-Batak of Northern Sumatra. (in preparation).

おそらく Het Rechtsleven der Toba-Bataks. Den Haag. 1933 の翻訳であろう。バタクの一部はキリスト教の流入によって生活の激変をみたので、部族内の差異は相当甚だしいものがある。

4. 慣習法集成

オランダはインドネシアを統治するに当たり、彼らの価値判断、思弁方法に関する理解を欠除して、多くの困難に遭遇した。それはイスラム法（フクム）とは異なる法概念である。その研究史についてはホルンホーフェンの「慣習法の発見」De ontdekking van het adatrecht. 1928（仏訳あり）に譲り、詳説しないが、とにかくイギリス人の中間統治時代を経て19世紀後半から開始されたといってもよい学問である。しかもそれが科学的に大成され、体系化されたのは G. A. Wilken, 1847-91 にはじまり、C. Snouk Hurgronje 1857-1936 を経て今世紀初め以来ライデン大学に C. van vollenhoven, 1874-1933 を迎えてからである。ウィルケン は宣教師 N. P. Wilken, 1813-78. の家庭に生まれ、メナド、中部スマトラ等に官吏として勤務した後、1885年から死に至るまでラ

イデン大学にあってインドネシア慣習法, 社会学, 原始宗教等を研究した。その全業績は死後編纂された F. D. S. van Ossenbruggen. (ed.) *Verspreide Geschriften*. 4 dln. Semarang. 1912. に詳しい。

さらに, 慣習法と回教法を研究し, その学識を原住民行政に適用して名声をあげた人にスヌック・フルフロニエがある。彼はライデン大学でアラビア学者 M. J. de Goeje, 1836-1909 に学び, *Het Mekkaansche Feest*, 1880 で学位を得たが, 自ら回教徒の中に入って彼等の生活のうちに民族精神, 言語を学びとらんとし, オランダ領事 J. A. Kruyt に随伴して Jiddah に至り, 1885 年 Abd-al-Ghaffār と変名して Mekka に潜入, 数か月滞在して民情を視察し帰国した。Mekka, met Bilderatlas. Haag. 1888-89. 2 bd. (その第二巻は Mekka in the latter part of the 19th century として J. H. Monahan により英訳刊行をされている。1931年) はこの時の研究成果である。1889年迎えられてオランダ東インド総督府の原住民事務局長となり, 前後17年間その職にあってインドネシア社会の宗教, 政治, 文化運動を研究し, 回教世界の動向を捉え, 総督に助言する業務に従事した。彼のこの事務局に迎えられた頃, スマトラ西北端の回教王国アチエーはオランダ政府に対して死闘を繰り返しており, その適切な献策とファンホイッツ將軍の平定作戦によって, 30年にわたり政府を悩ましたさしものアチエーも帰順したといわれている。その著 *De Atjehers*. Leiden, 2 Dln. 1893-94 (英訳 O'sullivan, *The Achinese*. Leiden. 1906) はその間の調査にもとづいて完成された金字塔とってよい。彼はつづいて隣接の民族ガヨ人の研究を行ない *Het Gajoland en zijne bewoners*. Batavia, 1903. を著わしている。1906年帰国, まもなくライデン大学アラビア語教授に就任, 1927年, 弟子 A. J. Wensinck に職を譲るまで研究と後進の養成に従事した。彼は巾広い東洋学者で本研究所の理事長を勤め (1918-20) あるいは欧の東洋学者を叫合して1925年 *Acta Orientalia* を創刊している。なお, その全著作は A. J. Wensinck の編した *Verspreide Geschriften*. 6 dln in 7. 1923-26. Bonn, Leipzig. xiv+3125 blz. に収められている。

インドネシア慣習法といえば, 先ず想起されるのはその大成者 C. van Vollenhoven であろう。実に彼

の30年にわたる調査, 資料蒐集, 体系化, 更に多くの弟子の養成によっていわゆるライデン学派の成立となったのである。彼の努力によって1909年当研究所内に設けられた *Commissie voor het Adatrecht* は1911年以降次々と慣習法集成を刊行し, 彼の死後も Van Ossenbruggen によって刊行されて現在までにインドネシア各地, フィリッピン, マライ半島, ニューギネア等45冊の刊行を見ている。かつて39巻までの索引が東亜研究所第四部(堀野雅昭担当)から蘭印慣習法総目次(部内参考用)として翻訳, 印書されたことがある。この集成は, 同じく彼の指導の下に1914年以降植民研究所(現熱帯研究所)から刊行された *Pandecten van het Adatrecht*. 9dln in 10 と共に, インドネシア慣習法研究の宝庫と称してよい。なお, 彼には *Adatrecht van Nederlandsch-Indië*. 3 dln. Leiden. 1918-32 の主著の他, 慣習法の誤認 *Miskenningen van het adatrecht* 1909. 2 ed. 1925. 慣習法小解 *Een adatwetboekje voor heel Nederlandsch-Indië*. 1910. 2 ed. 1925 *De Indonesiër en zijn grond*. 1919. 2 ed. 1925. さらにまた慣習法以外の論考を集めた論文集 *Mr. C. van Vollenhoven's Verspreide Geschriften*. 3 dln. Haarlem-Den Haag. 1935. 等がある。

5. 人類学論集

1960年以来, 文化人類学, 社会学的論考(必ずしも全部が東南アジア関係とは限らず, また寄稿家もすべてがオランダ人とは限らない)を編集して, BKI誌当該年度の第一分冊その他に収載, 1964年第一分冊まで VI 集, 40編の論考を数えている。

6. 研究所刊行物

その他研究所から発行された研究書, 辞書類等は今までに汗牛充棟もただならずという有様で, いちいち列举することは出来ぬ程である。既述のクーン書簡集, 外交文書集成, ケルン全集等の他に思いつくもの若干を記せば, オランダ聖書協会(N.B.G.)から派遣され中部セレベスに駐在し多くの論考を発表したアドリアニ師, 1865-1926の蒐集, 自由訳したバレーの物語が死後夫人(J. G. H. Gunning 教授の娘)により編纂出版されている。N. Adriani, *Barée-Verhalen*. 1932-33. 2 dln. 同じく北部メナド方面ボラングモンゴンドウのテキスト, および語彙集はドゥンネビエルが編している。W. Dunnebie, *Bolaang Mongon-*

dowse teksten. 1953. Bolaang Mongondwsch-Nederlandsch woordenboek met Nederlandsch-Bolaang Mongondowsch register, 1951. ジャワの史書であるジャワ年代記はかつて J. J. Meinsma が編したことがあったが、近年 W. L. Olthof が新訂を企てた。J. J. Meinsma-W. L. Olthof, Babad Tanah Djawi in proza, Javaansch Geschiedenis lopende tot het jaar 1647 der Javaansche jaartelling. 1941. 2 dln. A. Teeuw. Register op de tekst en vertaling van den Babad Tanah Djawi. 1941. スマトラニアス島の史料では W. L. Steinhart 師の Niasse teksten, 1954 がある。

(II) 図 書 館

研究所は購入、寄贈、交換等によって多数の関係図書を蒐蔵しており、1868年以來は東インド協会 (Indisch genootschap, 1854年、政治、経済方面に主力をそそぐ姉妹団体としてハーグに設立) の図書をも併わせて、東亜を中心とする豊富な図書を蒐蔵している。その目録は1908年以來正編補編計4冊となつて出版され、なお新版も近く出版の運びという。

G. P. Rouffaer, -W. C. Muller

Catalogus der Koloniale Bibliotheek van het kon. Instituut voor de Taal-, Land en Volkenkunde van Ned. Indië, 1908. x+1052 blz.

W. C. Muller, 1ste Supplement [1908-1913] 1915 viii+426 blz.

2de Supplement [1914-1925] 1927 viii+458 blz.

3de Supplement [1926-1935] 1937 viii+493 blz.

4de Supplement. afl. 1. Boeken over Indonesië. afl. 3. Tijdschriften.

協会はまたマライ語、ミナンカバウ語、アチエー語の文書を所持しており、かつてロンケルが B. K. I. 誌に発表した、これは冊子としても刊行された。

Ph. S. van Ronkel, Aanvulling der beschrijving van de Maleische-en Minangkabausche handschriften, benevens een Atjehsen handschrift 1946. 52 blz.

また近くは西欧語で書かれた協会所蔵、未刊校本の

目録も出版になった。

H. J. de Graaf, Catalogus van de handschriften in westerse talen, 1963 xi+172 blz.

W. C. Muller, Catalogus der land-en zeekaarten van-en uitgegeven door het Koninklijk Instituut voor de Taal-Land en Volkenkunde van Ned-Indië. 1913

以上研究所の刊行物を中心にオランダの東南アジア研究の状況を概観した。倉卒の間に纏めたので思わぬ過誤、脱落、不備等のあることを恐れるが、幸いに宥恕されたい。なお、東南アジアに関する研究論考の多く収載される機関刊行物としてオランダアカデミー Koninklijke Nederlandse Akademie van Wetenschappen, 地理学協会 Koninklijk Nederlandsch Aardrijkskundig genootschap, その他の報告書に関しても論及すべきであったが、それらについてはまた別の機会に譲りたい。[1964.8.8. 渡南の日稿了]

(追記)

本文 101 ページの言語学関係紀要に下記のものを補足する。

J. C. Anceaux, The Wolio Language, Outline of grammatical description and texts. 1952. 93p. [XI]

Wolio 語というのは、セレベスの南東部ブートン島の南西岸にあるもとのスルタン領 kota Wolio を中心に話されるインドネシア語系の言語である(約2万5千)。かつて言語官 E. J. van den Berg が調査研究をしたことがあったが、今次戦争で殺害され(1942)原稿は失われた。戦後アンショウ博士が、近代教育をうけた La Ode Manarfa (スルタンの息) や、その妻 Wa Ode Dawia らの協力をえてまとめあげたのがこの書である。

なおまた Buli 語の文法を著わした Maan は、もとハルマヘーラのユトレヒト布教協会 (U.Z.V) 宣教師、ブリ語の辞彙を編したこともある。Boelisch-Nederlandsche Woordenlijst met Nederlandsch-Boelisch register. VBG. 74 (1940)。

このブリ語というのはインドネシア、メラネシア語にまたがるインドネシア語系南ハルマヘーラ語の言語で、約千人位の住民に話されているに過ぎぬが、言語学的に興味深い位置を占めている。